



TITLE:

# 現実の仮面性と仮面の現実性 ーレールモントフの戯曲に見るロ シア社交界ー

AUTHOR(S):

木村, 崇

---

CITATION:

木村, 崇. 現実の仮面性と仮面の現実性 ーレールモントフの戯曲に見るロシア社交界ー. 人文學報 1995, 75: 179-209

ISSUE DATE:

1995-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48430>

RIGHT:

## 現実の仮面性と仮面の現実性

— レールモントフの戯曲に見るロシア社交界 —

木 村 崇

- I 仮面舞踏会、賭博、決闘
- II 「ふたつ」の戯曲の成り立ち
- III 『仮面舞踏会』の各場紹介
- IV 『アルペーニン』全5幕の内容
- V 「名誉」—この貴族的なるもの、  
「復讐」—この悪魔的なるもの
- VI ニーナの変貌とプーシキン夫人ナターリヤ

### I 仮面舞踏会、賭博、決闘

帝政ロシアの首都サンクト・ペテルブルグは水の都である。町の中心を流れるネバ川は、ここで幾筋かに分流する。そこからさらに何本かの運河を掘削して水路をはりめぐらせ、この都市の建設と日常の輸送に供してきたから、主だった宮殿や屋敷、寺院、その他の壮大な建築物はたいてい、いずれかの水面とアンサンブルを奏でることになる。もともとここはとてつもない湿地で、護岸工事を施し、水抜きをし、地面を固めなければ建物は建てられなかった。それでも地盤が緩んで、大きな建物が真ん中から二つに割れてしまうことさえある。空気は過剰な湿気を帯び、それが気象条件によって靄や霞、霧、ガスあるいはダイヤモンド・ダストの類となって漂う。だから時には、ペテルブルグの町並みを対岸から眺めると、全体が濃い乳白色のベールに包まれ、空中に浮遊しているような光景を目にすることがある。ピートル大帝が18世紀初頭に礎を築いたこの人工都市の「幻想性」とは、北国特有の淡い光と、千変万化する水滴との調和が醸し出す印象にまどわされた人間の心象風景に他ならない。

「これ以上に素敵なものはない、少なくともペテルブルグには」とゴーゴリの讃えたネフスキー大通りがエカテリーナ運河と交差するところにかかる橋のもとに、大きいけれど今は色あせて、埃が目立つうらさびしい建物がある。これがかつて、首都の男女がひそかな欲望を抱いて集い、昼とまごうばかりにシャンデリアに燦然と照らされた寄せ木細工の広間で、華やかな仮面舞踏会に酔いしれたたあのエンゲルガリト邸であるとは、事情通でなければ気がつか

ないであろう。通常の舞踏会であれば、宮中で催されるものはもちろん、貴族の個人邸宅で行われるものにも、貴族身分でない者が招かれることはめったになかったらしい。ところが、N. アッシュキナの風俗史的解説<sup>1)</sup>を敷衍して当時の様子を再現すると、仮面舞踏会は「公開」を謳っていたから、10ルーブリ（のちに半額に値下げ）といささか高いが、入場料さえ払えば一般市民も参加することができた。しかも皇帝ニコライ一世をはじめ、やんごとなきお方たちがお忍びで来るといふ評判であったから、ずいぶん賑わったという。主催者ワシーリー・ワシーリエヴィチ・エンゲリガルトの懐もさぞ潤ったに違いない。彼に仮面舞踏会開催権を独り占めされて莫大な収入源を奪われた帝室劇場の支配人たちが、のちにその特権を奪い返したので、エンゲリガルト邸での仮面舞踏会は1829年から1835年までの7年間しか続かなかったという。

仮面舞踏会が首都の有閑階級に好まれた本当の理由は、他にあった。エンゲリガルト邸に来た男性客の多くは仮面を着けていなかった。女性客はお目当ての相手を言葉巧みに誘い、挑発し、じらしたうえで、術中にはまった相手と、正体を明かさぬままきわどい行為に及ぶこともできたといわれる。仮面舞踏会では、女性が主導権を握るだけでなく、身分の差もないのが建前で、お互いを身内間の二人称代名詞である「トゥィ」で呼ぶことになっていた。そこでの出来事は表の社交界ではとがめだてしないのがルールであった。もっともルール破りをされて、名誉を傷つけられる危険がなかったわけではないであろう。いやむしろその危険がいつも背中合わせだったから、「冒険」はいっそう刺激的だったのだ。

仮面をつけると、人は奇妙な倒錯感を体験する。上流社会の人間は、序列や体面、社交界の作法や交際の機微の意識にがんじがらめになっているために、素顔はすっかり疎外化され、仮面に化している。素顔は自分の生身の顔というより、社交界に認知され登録されている「商標」のようなものであった。ところが仮面は、ひとたびそれで素顔を覆い隠してしまえば、逆に疎外化される以前の真の素顔がさらし出されるような快感を覚えさせてくれた。しかも、社交界で築きあげた地位や評判を少しも損なうことなくである。これでは社交界の誰もが病みつきにならぬわけがない。しかしこれでは、それから逃れたいといっていたものを、温存したいとも思うのと同じであるから、どだい虫のいい欲求である。仮面舞踏会では「無礼講的秩序」（疑似反秩序といってもよい）が支配し、決して「無秩序」にならないのは、相反する両方向から彼らの本能を刺激するこのふたつの力が拮抗して働くからだといえるだろう。どれほど巧みに変装したところで、身近なもの同士なら相手の正体を見破られないわけがない。だから、お互いに「見破られないことにしよう」という暗黙の了解は、仮面舞踏会という一時の場を共有するものたちにとって欠かせない掟だったはずである。ところがこの仮装による仮想は、自分だけが密かに掟破りができたらどんなに快感だろうという邪な欲望を誘発せずにはおかない。仮面舞踏会の存立基盤は本質的に危ういのである。

この欲望には、現存秩序への恨みがましい思いが隠されている。一方に、名門ではあるが今

や体面を保つのもままならないほど経済的に破綻している者がいる。他方に、世間の輿論を顧みない手段で皇帝の寵愛を受けることに成功し、今を時めいている新興貴族がいる。彼らも、成り上がり者を見る視線をいやでも感じるから、心中は穏やかでない。これらの貴族たちにすれば、社交界のように高度に洗練された差別体系は、他の社会階層には許されない特権を独占的に享受していることにたいする満足よりは（それは自明のことだから意識にはのぼらない）むしろ、遇されてしかるべき序列からはずされていると思うことによって生ずるフラストレーションや、社交界内で隠微に繰り広げられている出世競争上の対抗心、羨望、怨嗟を潜在化させずにはおかない。このような社会心理的な有害物の増大は、特権階級としての一般的満足を帳消しにしてしまう危険をはらんでいるのである。だから有害物を適宜に発散させるための装置が生まれる。決闘と賭博という、ヨーロッパ社交界全体に共通する現象は、おそらくそういった装置のひとつであった。

決闘は貴族に固有の現象といってよいが、賭博は汎階級的ではないかという疑義が生ずるかもしれない。たしかに「打つ」は「飲む、買う」とならんで、身分を超えた男の根源的欲望にはちがいない。だが、労働の義務を負わされた階級にとって、遊びの中の遊びたる賭博のたどった道は、いつも「あるまじき行為」という烙印とのせめぎあいの歴史であった。これに対して、労働から解放されていることが自分たちの存在を規定する条件であった貴族階級には、遊びは「正業」だったのである。サイコロ遊びが貴族の子供たちの教育手段として使われていたことを伝える9世紀フランク王国で書かれた『教育論』は、それをよく語っている<sup>2)</sup>。貴族の娯楽には、騎士道のなごりである狩猟があるが、その時活躍した動物で、騎士道において象徴的意味を付与されていた馬の、純粋に疾駆能力だけを競わせて賭博の対象とした競馬が、貴族の特権的娯楽として登場したのは当然の結果であった。イギリスでは、「アスコット競馬に王侯貴族がかならず行かねばならないの」<sup>3)</sup>は、それが彼ら貴族のノブレスの対価として求められるオブリジェでもあったからだとされる。このことを指摘した山田勝はまた、「決闘も命をかけるという意味で、『究極のとばく性』と騎士道精神の骨格をなす『名譽の闘い』が重複したものであった。その点では、決闘は貴族のスポーツと解釈してもいいだろう」<sup>4)</sup>と述べている。

発生学的アスペクトのかぎりでは、その通りであった。では先述の社会心理的アスペクトでは、賭博と決闘は貴族文化の体系を支えたどのような装置だったのだろうか。考察対象をこのように捉え直してみると、現代文化の構造とは奇妙にずれた断層のようなものが見えてくる。まず、これらは「合法的」とは言えないが、当事者の意識には「裏文化」の「うしろめたさ」はなかったし、「下位文化」の「ひけめ」もなかった。これは発生学的にもうなずけることである。では「表文化」であったのかというと、かならずしもそうではなかった。あえていうなら「超表文化」だったのである。どの文化圏においても、貴族身分の者とはいえ賭博や決闘は、表向きは禁止されていたし、違反者が罰せられることもまれではなかった。しかしそういった

世俗的規制を超えた規範に従うことを貴族はむしろ誇りにした。

これは、逆説的に聞こえるかもしれないが、反社会的であるために裏文化とみなされる、やくざの「博打」や「出入り」の美学ないしは倫理に通ずるものがある。両者とも労働しないことが常態なのだから、この類似性は当然かもしれない。「賭博、決闘」と「博打、出入り」は対他的には、他の社会構成諸階層からの遊離を際立たせる弁別機能を担うという点で共通する。貴族が「名誉と勇氣」を誇れば、やくざは「侠気と度胸」をうそぶくという、似通ったエートスを有するのも偶然ではないだろう。しかし対自的には、両者は決定的な違いを見せる。やくざにとって博打は重要な資金源であったし、出入りは勢力範囲の維持や拡大のために不可欠な行動であったから、どちらもいわば彼らの「生活実態」そのものである。したがって彼らの存在自体が「裏文化」に属する以上、博打も出入りも彼らの屈折した「うしろめたい」心情を極限までつのらせ、転じてそれに陶酔させることになる。やくざの「満足」はもとはといえば被虐的なものなのだ。だから彼らが自己を誇示する姿には、どこか虚勢くさいものが漂っている。これに対して上流社会で行われていた賭博や決闘は、それをしなくとも貴族であることはいささかも脅かされはしない（むしろそれに手を染める方がはるかに危険である）。にもかかわらず貴族社会が賭博と決闘の温床になってきたのは、彼らの既成秩序内に生成される社会心理的な澱を、その秩序の論理で浄化するという、自己完結的な秩序維持機能をはたしていたからなのである。

一枚のカードに運命を託すとき、社交界ではお互いに同列には置かれていなかった人々が、仮想ながら一時的に対等な関係に置かれる。いや、実際に奇跡的な勝利をおさめれば、失った身代を取り戻せるチャンスだってないわけではない。そうなればこれは仮想ではなく現実となるのである。巨万の富を築いた人間がはした金を賭けるのと、そのはした金が全財産よりも多い人間とでは、リスクにかかる情熱や勝負の快感は反比例する。その意味でも賭博はだれにも分け隔てがなかった。決闘はもっと平等である。名誉は、貴族である限り、由緒や偉功、資産規模の別なく、いかなる時にも大切に守らねばならない価値であった。受けた侮辱を決闘によって雪ぐのは、この名誉を回復するための気高い行為とみなされたのである。武器を手にして向き合った同士には、もう上流社会での序列や家柄の優劣も、評判や処遇の差も存在しない。彼らは貴族であるという共同性だけを媒介にして（決闘は貴族以外の者とは行わなかった）、おじけ心をこらえながら、一連の儀式に則ってその特権的価値を確かめ合おうとしたのである。

賭博や決闘には、仮面舞踏会がもたらした無礼講の効果と同じような効能があったことが、これで納得されよう。すくなくともそれを行う者たちの無意識の了解事項としては、これらは貴族の形骸化した束縛や歪んだ秩序を一時的にせよ正してくれそうに思われるトポスを提供していたのである。そこで彼らが満喫したのは、貴族のたてまえを崩さずになされる、まさに語源的意味でのレクリエーションであった。

しかし貴族もまた人間である。人間のすることにはどのようなものにも、人間存在の原点に向って作用する求心力が働いている。賭博が佳境にはいると、貴族の頭に浮かぶことも、やくざの感じることも実際には同じであろう。違いはそれをどう意味づけるかの差にすぎない。決闘の場に立ったとき、膝が震えているのを気づかれたくないと思う貴族も、出入りを前に、顔が恐怖でけいれんしているのを気づかれぬよう氣勢を上げるやくざも、実は人間として当たり前の生理を体験しているのである。人類はこれまで、「死をも恐れぬ」ことに特別な意味を付与した例を数えきれぬほど見てきている。その「崇高」な意味が有効なのは、当人の属する個別文化の存立条件が成立しえた間だけであったことも見てきた。切腹や殉死の行われていた時代にまでさかのぼらなくとも、特攻隊や玉砕がつい半世紀前に賞賛されたことを思い出すだけでも、その相対性を理解するには十分であろう。

「有意味」と思われることが「無意味」でもあることを見通す力は、自分がそこに属している個別文化の内的視点だけでなく、それを超えた視点も合わせ持つときに得られる。この能力を持った作家はたしかに存在した。人間存在のそのような深みを洞察した文学作品を書くことができたものは、方法や様式がどうであれ、文学的生命を今日まで維持している。ロシア文学には、賭博や決闘をとりあげた作品がわりと多い。プーシキン『ペールキン物語』に収められた珠玉の短編や『スペートの女王』、ゴーゴリやドストエフスキ、レフ・トルストイ、クプリン、チェーホフなどの印象深い作品や場面を、いくつも思い浮かべることができる。

これと対称的に、仮面舞踏会を描いたもので今日でも読むに耐えうる作品はあまり残っていない。ロシア・ロマン主義は異国情緒にばかりでなく、同時代の現実にも陳腐な世界に対抗する「価値あるもの」が生まれていることを見ようとした。上流社会が営む「生理」を視覚的に提示してくれる仮面舞踏会は、まさに恰好の対象であった。ところが作者自身がその「生理」に取り込まれていながら、同時に醒めた目でそれを描くことのできた作品はめったにない。レールモントフの戯曲『仮面舞踏会』は、最初の、しかも唯一の例といってよかった。1993年にロシアのトヴェリ市で開かれた「国際プーシキン会議」で筆者は、この『仮面舞踏会』と、その全面的改作である『アルバーニン』には1836年のプーシキン夫妻の辿りつつあった運命が、社交界の日常を映し出す中心的な光景として意識されているのではないか、という問題提起の口頭報告をした。この仮説を立証するためには、たんに「伝記的事実」と描かれていることの類似性を指摘するだけでは、説得性がない。なぜそのようなものが見えたのかという地点まで遡るためには、レールモントフという劇作家の視点にそなわったメタ視点性を分析しなければならないと考えている。レールモントフが、ペテルブルグ社交界で苦しみあえいでいたプーシキンを、「火中の人」としてクローズアップして見ていただけてだけでなく、ロングショットの位置に下がって、どのように火が煽られていたかもあわせ睨みながら見ていたことは、のちに見るように挽歌『詩人の死』によく現れているのだが、じつはこれとおなじ観察手法が、それより1

年少し前に書かれたこれらふたつの戯曲においてすでに用いられていたのである。レールモントフは最後までロマン主義の気分を持ち続けた詩人・作家であったといってよいと思うが、この視点だけはロマン主義とは異質である。彼にはいったい、同世代の作家たちとはちがった何が見えたのか。手始めにそれを解き明かそう。

## II 「ふたつ」の戯曲の成り立ち

「ふたつ」と括弧でくくった理由を述べよう。旧ソ連での伝統的な評価によれば、『アルペニン』は検閲への度重なる妥協の末にたどり着いた、『仮面舞踏会』のより悪い改作にすぎない。この立場の根底には、テキスト・クリティークがめざすべきは、もし検閲から自由であったとすればレールモントフが書いたであろうテキストを再現することだという価値観がひそんでいる。これは「ひとつの戯曲」論といえよう。しかしこういった価値判断を離れて客観的に事態を眺めれば、登場人物の性格付けや構成の大幅な改変、状況設定の根本的な違い、筋の展開とその動機・原因の見直し、それらの結果としてのテーマの質的な変異が見られるのもまた事実である。これらをすべて「検閲への妥協」で説明するのは、たしかにそれが誘因ではあったにせよ、とうてい無理である。こちらの立場では『仮面舞踏会』と『アルペニン』は独立したふたつの戯曲だということになる。そこでひとまずは判断を留保して、「ふたつ」と、限定語に括弧を付しておこうというわけである。

ここで、執拗にくりかえされた戯曲改作の経緯をかいつまんで説明しよう。第1の版といわれるのは、今世紀30年代に発見された、作者以外の者の手になる書写稿であり、第2の版は、これに作者が推敲を加えて施した大量の校正をつなぎ合わせて再現した「著者」稿を指す(1956年発行のアカデミー版レールモントフ全集第5巻の解説は、これを第1の版と区別していない)。レールモントフは1835年10月はじめに3幕ものの戯曲を演劇検閲(著作物の検閲とは別になされた)に提出する。このテキストの内容は検閲官が上官にフランス語であらすじを報告しているので、おおよそ検討がつくが、テキストそのものは未発見である。これが第3の版である。この第3の版は皇室官房第3局(秘密警察的任務を司った)局長ベンケンドルフ伯爵の「要望」を受け、同年11月8日に「書き直しの必要あり」という理由を付されて著者に差し戻される。レールモントフはさっそくこれを4幕ものに仕立てなおし、12月に再度検閲突破を試みる。これが第4の版である(前掲全集5巻の解説では、第3の版)。このときレールモントフ自身は故郷の領地タルハーヌイへ休暇をとって帰省しているので、手続きは当時同居していた親友ラエフスキイ(後に『詩人の死』をレールモントフと一緒に手書きで流布させ、追放刑に処せられる人物)を通じて行われたが、これも翌年1月、上演不許可となった。4幕ものについても同じ検閲官オリデコフが変更点をまとめた報告書をしたためている。彼は

『仮面舞踏会』に描かれている社交界の「生態描写」を、フランスですでに廃れてしまったメロドラマの悪趣味な模倣で、婦人のモードならいざしらず、残忍非道なものをまねることは有害だという見解を添えている。テキスト・クリティーク的には多少議論の余地は残るものの、今日どの全集に『仮面舞踏会』の基本テキストとして採用されているものがこの第4の版である。レールモントフはこれにもめげず、事件がくりひろげられる場所から基本的な筋の展開、葛藤の内容、登場人物の構成、大団円とその結末にいたるまで、全面的にあらため、題名も『アルペーニン』と変えたうえで別の戯曲として、1836年10月、再再度検閲に提出したのである。これが第5の版である。検閲官はまたもエフスターフィ・オリデコープであったが、今度ばかりはさすがの彼も、作者の熱意に感ずるところがあったのか、報告書には否定的なコメントはつけ加えなかった。しかし現存するこの報告書にも「上演不許可、1836年10月28日」という上書きが記されている。

本論考ではおいおい明らかにしていくが、テキスト・クリティーク的なレベルの判断とは別の理由で、『仮面舞踏会』と『アルペーニン』を別々の戯曲として見ることにする。これに関していえば、旧ソ連で行われてきたこれまでの研究では両者の一体性はほぼ自明のものとされてきた。題名、筋、登場人物の大幅の改変も、検閲事情によるのであって、独立した作品のアイデンティティをなすような積極的な要素ではないと考えられていた、ということを繰り返し確認しておきたい。1981年にロシア文学研究所（プーシキン館）によって公刊された『レールモントフ百科』でも、戯曲『アルペーニン』は独立した項目ではなく、『仮面舞踏会』の項目の末尾に追い込まれている。没後100周年を記念して1941年に出た論集『レールモントフの「仮面舞踏会」』に所収のエイヘンバウム論文『「仮面舞踏会」の五つの版』は、題名からも明らかのように、『アルペーニン』の自立的価値を認めていない<sup>5)</sup>。エイヘンバウムは、テキストそのものを完全に復元することは無理にしても、現存資料を使って可能な限り、レールモントフが最初に検閲に提出した3幕ものの『仮面舞踏会』の内容を解明する努力をすべきだと言っている。彼のこうした『「仮面舞踏会」ひとつ論』がその後の学界の基調を作り出したであろうことは容易に想像できる。この戯曲のテキストの複雑な成立過程をフィロロジー的な研究の対象にすることは、それ自体価値あることで、筆者も過去に試みたことがある<sup>6)</sup>。しかし今回は視点を変えて、これを、現実と仮想という文学テーマへの接近方法の転換過程としてとらえなおしてみたい。

問題にしようとしているふたつの戯曲がわが国でも広く知られていれば、いちいち内容を紹介する必要はないのだが、『仮面舞踏会』の唯一の邦訳は現在では入手しにくいうえに今後改善を期待したい箇所も多く<sup>7)</sup>、『アルペーニン』にいたっては、邦訳そのものがない。そこでまず両戯曲の大体の筋をなぞっておきたい<sup>8)</sup>。



## Ⅲ 『仮面舞踏会』の各場紹介

4 幕10場からなる『仮面舞踏会』（上記の第4版）には、主な人物として、アルバーニン夫妻（名はそれぞれエヴゲーニイとニーナ）、貴族青年ズヴェズヂチ公爵、エヴゲーニイの旧友でうだつの上がらぬ賭博師カザーリン、社交界でアルバーニン夫妻とは付き合いのあるシュトラール男爵夫人、社交界に徘徊していかがわしい斡旋稼業に携わりながら、諜報関係の手先でもあるらしいシュプリフ、それに第4版に追加され、新たな第4幕ではじめて現れる正体不明の男らが登場する。各場毎にドラマの展開を追ってみよう。

〔1 幕1 場〕 劇はいきなりカード賭博の場面で始まる。未熟なズヴェズヂチ公爵は名誉の象徴である肩章まですりかねない大負けをする。シュプリフはさっそく近づき、賭金を都合しようとする。そこへ結婚後賭場を離れて久しいアルバーニンが現れると、居合わせたカザーリンは彼にシュプリフを紹介する。アルバーニンは初対面ながらどうやら相手のいかがわしい正体は知っているらしい。賭場に出入りする人間たちを指しながら旧友カザーリンが洩らす情報から、色事師とか決闘家、外地でうまいこと出世した男などの来ていることが分かる。かつての賭博師アルバーニンも、今は若い愛妻ニーナとの結婚生活にすっかり引きこもり、人前に出るのも久しぶりらしい。アルバーニンは顔見知りのズヴェズヂチ公爵が打ちひしがれているのを見つける。自分が大負けをしてどん底を体験したときのことを思い出したアルバーニンは、勝つためには肉親も友人も名誉も犠牲にして、奥義をきわめるまで技を磨き、卑劣漢呼ばわりされても平然としておねえと教える。アルバーニンは急に賭博好きの血が騒ぎ、ズヴェズヂチ公爵にかわって勝負し、負けを取り戻してやる。感謝する公爵。そのあと彼らはそろってエンゲルガルト邸の仮面舞踏会に繰り出す。やんごとなきご婦人方もお越しになるらしく「人の話では、来る人の中には…」と口ごもる公爵に、アルバーニンは「言わせておけばいい、我々には関係ない。仮面の下ではみな平等だ。仮面には心も身分もない、あるのは肉体だけだ。仮面で顔かたちが隠れてしまえば、気持ちを隠していた仮面は大胆にひっぱがせるというものさ」という。

〔1 幕2 場〕 ズヴェズヂチ公爵はアヴァンチュールを期待するが、なかなかはたせない。アルバーニンは、社交界ではダイアナのように貞淑な女性が、仮面舞踏会ではヴィーナスのような奔放な女になるといって彼をそそのかす。しかし自分自身是集っている連中に違和感を覚えている。仮面の女がズヴェズヂチ公爵に辛辣な世代批判の言葉を浴びせ、じらせながら誘惑し、舞台裏へ。アルバーニンは男の仮面に侮辱されたとして口論し、その相手を卑怯者呼ばわりする。男はアルバーニンの不幸を予告して消える。舞台では口説こうとしつこく付きまとう男を振り切ったひとりの女の仮面が、ブレスレットを落として逃げる。またシュプリフは、口

論していたアルバーニンをスパイよろしく監視している。アルバーニンは彼を、「浅黒い鼻ひげ男がおたくの美人の奥さんのもとに通ってくるそうですな」と言って嘲弄し、口笛を吹いて去る。「自分こそ寝取られ亭主になるぞ」と背後から罵るシュプリフ。ズヴェズヂチ公爵に付きまとわれ、仮面を剥がされそうになりながら女性が走り出てくる。彼女は、社交界では羨望的になっている自分が男のくびに取りすがって官能の喜びを求める姿など、誰にも覺られたくない。ふとブレスレットの落ちているのに気づき、何か記念の品をと迫る公爵にそれを渡そうと思いつく。男というものは、あとになって人前であれが例の女さと指さして笑いものにする習性があるからといって逃れる口実を並べ立てるが、ついに根負けし、自分のものと偽ってそのブレスレットを手渡し、群衆の中に消える。呆然としているズヴェズヂチ公爵のところへアルバーニンが現れる。夢見のような体験を彼の耳元でささやき、ブレスレットを見せる公爵。一瞬アルバーニンに疑念がよぎる。公爵は彼女を探し出すと宣言する。

〔1幕3場〕 アルバーニンは帰宅して、仮面舞踏会での自分の振る舞いを自嘲する。夜中の1時過ぎになっても妻が帰っていないのを知り、かつては他人の妻たちを待たせた自分が、わが妻を待ちわびる身になるとはと慨嘆する。愛のない戯れの恋ばかりにむなしく過ぎ去った青春時代。生きることに退屈し、身でも固めようと思ってニーナと結婚したのにもかかわらず、アルバーニンは皮肉にも愛することを知り、人間らしさを回復したと独白する。そこへニーナが帰宅する。夫の言葉に非難がましさを感じ彼女は、伊達男たちの好奇の目には終日さらされながら、夫である自分と居るのはほんのひとときと不平を洩らすくらいならなぜ、社交界など捨てて、田舎で一緒に暮らそうと言ってくれないのかと開き直る。彼女は舞踏会も、華麗さも、流行も、退屈な自由も捨てる用意はあると言う。ニーナには夫が嫉妬もしてくれぬほど愛情に淡泊だという不満がある。アルバーニンは、貴族の男のつねとして、嫉妬をはしたない行為とみなす態度をとる。妻よりずっと年上のアルバーニンは、まだ人生のページが始まったばかりのニーナに、二人の愛しかたの違いと、その原因である自分の忌まわしい体験（それはレールモントフの物語詩『悪魔』や長編小説『現代の英雄』の主人公のそれに通ずる）を告白する。ときどき無口で不機嫌になるのは、人間的に甦ったはずなのに過去に引き戻されることがあるからだと弁明する。そのように熱っぽく愛を語るアルバーニンは信じられるのに、でも…とニーナはためらう。幸せだと強調する夫の言葉が、ニーナの耳には上滑りに聞こえる。アルバーニンはニーナがブレスレットをしていないのに気づき問いつめるが、彼女は夫がなぜそんなことにこだわるのか分らない。馬車を調べさせられた召使いは、落とした場所は仮面舞踏会だと明かす。アルバーニンは舞踏会へ行くのなら気兼ねなくエスコートしてやったものをと平静をよそおいながら、誰と行ったのかと問う。ニーナは嫌疑をかけられて立腹し、開き直る。アルバーニンは、偽りに満ちた人生の末に見つけた本当の愛の対象となった妻が、もし裏切ったとなれば復讐すると言って激怒する。彼はもはやニーナに情夫がいるものと信じて疑わない。

ニーナは無実を訴えるが聞き入れられず、神の裁きを待つしかないと絶望する。

[2幕1場] シュトラリー男爵夫人宅。ジョルジュ・サンドを読んでいる彼女は、女が男の情欲と気まぐれの玩具でしかなく、世間は女性が自ら積極的に人を愛したり、欲望を抱いたりすることを認めないし、きびしい仕打は避けられないと独白する。昨日の仮面舞踏会での出来事が気になって読書に没頭できない。ニーナ訪問。彼女は眠れず、顔色悪く目が赤い。そこへズヴェズヂチ公爵がピクニックがとりやめになったことを告げに来る。彼は仮面舞踏会の方が20倍も面白い、あなた達も仮装は好きだろうと言う。男爵夫人は、それは誹謗だと反論し、まともな女性はいかがわしい者たちの集まるあんなところへ行くはずがないと言う。公爵はニーナがブレスレットを買いに行くところを目撃したと告げる。片方落としたのでと臆せず言うニーナの態度に、勝手に「狼狽」を読みとった公爵は、後日の出会いを約束して誰かにあげたのでは、とかまをかける。ニーナは立腹し、シュトラリー男爵夫人に明日の訪問を待つと告げて帰る。公爵は男爵夫人に、ニーナと仮面舞踏会で会ったことを証明してやったと言い、ブレスレットの話をする。男爵夫人は女性の名誉を大切にせよと忠告。公爵は帰る。もし事の真相を打ち明けたらズヴェズヂチ公爵公爵は自分の名誉も平気で踏みにじるだろうと、シュトラリー男爵夫人は知らぬふりをするに決める。彼女は世間の噂、嘲笑、悪意のこもった「同情」がこわい。そこへシュプリフが入ってくる。男爵夫人の亡き夫は5年ほど前に彼から数千ルーブリを借りている。彼女は利子分は一度に払うと言うが、シュプリフの関心は社交界のスキャンダルに向いている。男爵夫人は彼にズヴェズヂチ公爵とニーナの関係をはのめかし、これで自分は救われたと思う。シュプリフはこの噂に首を突っ込んで、せめて貸した金の利子分ぐらいの儲けの種にでもしようという魂胆。

[2幕2場] アルバーニン宅の書斎。アルバーニンは嫉妬していることを自覚している。証拠がなく決断もできず、また上流階級の男たちのように見ぬふりもできず苦しむ。ニーナへの書き付けが届き、彼が出ていく。玄関の間では、今では羽振りのよいアルバーニンと組んで、賭博で大儲けしようとするカザーリンが待っている。シュプリフが合流し、アルバーニンが寝取られ亭主になったらしいとのしぐさをする。公爵の書いた書き付けを少し修正して届けたのだと打ち明ける。気を付けろというカザーリンに、シュプリフはこれまで決闘も申し込まれずうまくやってきたと応える。話はボルゾイ犬の売買の斡旋の用件に移るが、カザーリンは上の空でとりあわず、女房はさばけても犬はさばけないだろうと皮肉る。アルバーニンが手紙を持って入って来るが、彼らには気づかない。家に出入りしていた人物が妻の情夫だと思いこみ、恥をかかされたと怒って手紙を読む。血の復讐をと思ったとき、カザーリンがいるのに気づく。シュプリフはこっそり姿を消す。カザーリンはカード賭博の魅力をしきりに強調するが、公爵への復讐で頭がいっぱいのアルバーニンは聞いていない。カザーリンは、アルバーニンが名誉も富も犠牲にして女を愛したところで、女は少しも感謝などしない、それは彼女を

手に入れたという欲望と自己満足の結果だからだという。アルバーニンは女性の中に地上の天国を探していた自分の愚かさを認める。カザーリンはあいもかわらず放蕩時代の自分たちの生活を懐かしむ。アルバーニンは、過去に悪徳・悪行の愉悦を知った自分は、夫となり父となり、安らぎのある家庭生活を送れるような資格はなかったのだと叫んで、美德との短かった付き合いに別れを告げ、椅子に倒れ込んで顔を覆う。

〔2幕3場〕 場面は変わって、ズヴェズヂチ公爵宅の一室。公爵は寝ている。アルバーニンが殺意を抱いて訪れるが、召使いは留守をよそおう。彼は、受けた侮辱にはかならず仕返しをする世代の人間で、ひざまづいたりはしないということを思い知らせてやると独白し、部屋へ入る。しばらくして、どうしても殺せずに青ざめて出てくる。自分の臆病を恥じるアルバーニン。しばらく沈黙して座り込んでいるが、殺人はもはや時代遅れ、教養ある生まれの自分としては言葉と金という「短剣」と「毒」を使うことにすると独白する。メモを残して帰ろうとしたとき、ベールをかぶった婦人と出くわす。アルバーニンは彼女を捕らえてベールを上げろと言う。間違えただけという彼女に、場所じゃなく、時間だろうと言って取り合わない。ベールをめくり上げると、ニーナではなくシュトラリー男爵夫人であった。アルバーニンは黙っていることを約束する。そしてなぜ女性たちの方から、よりによってこんな男に近づくのか教えてくれと頼む。彼はニーナがズヴェズヂチ公爵に、すべてを犠牲にしてまで「惚れこむ」理由が分からない。男爵夫人はなかなか手紙の真相を明かすことができない。むしろアルバーニンは二人の手引きをした女だと誤解し、不躰な質問で彼女を当惑させ、脅迫めいた言葉を残して立ち去る。シュトラリー男爵夫人は背後からニーナの無実を訴えるが、その声は届かない。ズヴェズヂチ公爵が目覚め、男爵夫人が来ているのに驚く。彼女はすべての罪は自分にあると告白。ニーナが公爵を愛しているという噂を信じて不注意にも手紙を書いたらしいが、すべては嘘だと教える。ニーナは何も知らず、夫のアルバーニンは手紙を読んですっかり誤解しており、公爵を殺しかねないと言う。ズヴェズヂチ公爵は、アルバーニンは上流階級の人間だから、むやみに騒ぎ立てたりはしない、冷静に決闘で決着をつけるだけだとこたえる。もし公爵の命を大切に思う人がいたらと、シュトラリー男爵夫人がたしなめても、彼はアルバーニンの名誉を傷つけた代償としての、決闘のことしか頭にない。男爵夫人はついに「あの仮面は私だった」と告白し、プレスレットをニーナに返して、すべてを秘密のままにしておいてほしいと頼む。公爵は駆け寄ろうとするが、それを制止して立ち去る。残された公爵はどうしてよいかわからぬまま、アルバーニンの残したメモに気づき、読む。それはN宅で今晚楽しいひとときを過ごそうという招待状であった。

〔2幕4場〕 N宅の一室。カザーリン、主人N、アルバーニンの三人がカード賭博をやっている。カザーリンは、アルバーニンが昔の彼に戻ったと思っている。どうやら公爵から儲けを取り戻す陰謀があるらしい。公爵がやってくる。自分は社交界のしきたりに従い、亭主の気

に入るように気を配る一方で、その女房の尻を追いかけている、だからあちら（色事）で勝ちさえすれば、こちら（賭博）では負けてもかまわない、と公爵は傍白する。アルベーンは公爵宅で女性の姿を見かけたと挑発し、自分には情夫たちが求める高潔さはないから、公爵が妻のお気に入りにはなあってほしくないと言う。しかし傍白ではげしい復讐心をあらわにする。アルベーンはカードを配りながら、ある地主が、めんどろをみてやった友人に貞淑だとばかり信じていた自分の妻を口説かれてしまったという、若い頃聞いた小話をする。地主はつまらぬ言いがかりをつけて、その友人の頬をひっぱたいと語る。決闘に訴えず、平手打ちだけで放っておくのは規則違反だという公爵に、アルベーンは、憎悪だの復讐だのにどんな法律や法令があっただろうと反論する。突然アルベーンは公爵がカードをすり替えたといって卑劣漢とのしり、トランプを顔に投げつける。公爵は呆然とするが、しばらくしてアルベーンの外以外にこの侮辱を雪げるものはないと叫ぶ。応じようとしぬ相手は臆病者となじめるが、アルベーンの方は自分は臆病だが公爵はその臆病者さえ脅かすことができないといなす。公爵が、ニーナとのことをばらすぞと口走っても、しかしその罰は今すでに下したところだと反撃される。殺すぞといえ、さっさとやらないとその勇ましさは一時間後には冷めてしまうだろうと揶揄される始末。公爵はどうしても名誉を挽回できぬあせりから、アルベーンに「あなたは人間か、それとも悪魔か」と叫ぶ。答えは「賭博師さ」であった。アルベーンは、もはや名誉は取り戻しようがない、善と悪の境の障壁などというものは今や取り払われているのだからと論じ、公爵が世間からつまはじきにされ、恥辱に苦しみ続けるだろうと予告して去る。

〔3幕1場〕 舞踏会。主催者はシュトラリー男爵夫人を待っているが、客の一人が彼女は今朝田舎へ行ってしまったと告げる。客たちが、ズヴェズデチ公爵は賭博で負けたい、いや、いかさまがばれてびんたを喰らったのだ、決闘もしない下司だなどとあれこれと噂しているところへ、公爵が現れる。彼はニーナに夫から仕返しがあると警告し、プレスレットを返す。当惑する彼女に、公爵はカフカーズへ行くと行って永久の別れを告げる。アルベーンは、昔は辛辣に咎めてやったこともあった世間のくだらない連中が発する、含みのある言葉がちくちく刺さると独白する。自分の権威を台無しにした二人の女性のうちの一人、心から愛していたのに裏切った妻には、自ら「最後の審判」を下そうと決意する。神なら許しもしようが、悪漢たる自分には許すことはできない、死はニーナにとって避けられぬ運命なのだといい放つ。彼は十年ほど前、一夜の賭博で有り金残らず失ったことがあった。毒を買ってきて再びカードのテーブルについた。残っていたルーブリを賭けて、これで負けたら毒を仰ぐと覚悟をきめたのであった。負けは取り戻せたが、以後ずっとそれを「暗黒の日」のために護符として持ち歩いていた。ニーナは舞踏会の客たちに求められてロマンスを歌うが、それは、思いを寄せているひとの悲しげな様子を見るのは、彼女が他の男と幸せではないことの証なのであまり心は痛まないけれど、その目に幸せが突如輝いたりすれば、密かにせつなく苦しみ、胸には地獄が

広がるという、男の秘めた恋心を歌ったものだった。おしまいところで夫が現れ、ニーナは歌詞を忘れてしまう。気分がすぐれず休んでいると、客たちはそれぞれ部屋に散り、アルバーニンと二人きりになる。暑いというニーナに、アルバーニンは毒を振りかけたアイスクリームを持ってきてやる。ニーナは不吉な予感がする。アルバーニンが青ざめているのに彼女は気づく。彼は空になった器を投げ捨て壊してしまう。気分が悪いから家へ帰ろうとさそうと、ニーナは今日は何か彼女に不満なことがあって陰鬱なのか、と尋ねる。アルバーニンは彼女に満足だったと答える。正体不明の男が一人だけ舞台に残り、ニーナに同情して思わず飛び出しかけたが、すべては運命のなすがままにまかせよう、自分の出番はもっと後だと言って去る。

〔3幕2場〕 アルバーニンの寝室。ニーナは、顔色が青いという下女に息苦しさを訴える。本を読もうとするが、公爵のことを思い出してうんざりする。夫が現れる。彼女は、頭が火のようだ、アイスクリームのせいで風邪をひいたのではと問うが、アルバーニンはまともに答えない。夫の態度の急変は仮面舞踏会へ行ったためだろうから、もう行きはしない、でも一度うっかり行っただけなのと言うニーナに、夫はかわらず冷たい。彼女はそんな性格を知っていたら、結婚などしなかったものと、夫の愛と自分の人生を疑う。アルバーニンは人生ははかなく、誕生から死までは目に見えぬ傷による心労と苦痛の連続で、総じて欺瞞なのだから、早くおさらばしたほうがいいと言う。ニーナは生きていたいと叫ぶものの、次第に毒がまわって苦しくなり、医者と呼ぶように頼む。アルバーニンは応じず、死にそうだと訴える妻に、時計を見ながらまだ半時はあると答える。愛していないのだと嘆く妻に、彼は我が胸に地獄を放り込んだ見返りに愛せよというのか、あれほど愛したのに、その見返りは背信行為だったではないかと責める。彼自身も苦しさのあまり気が狂いそうになる。ニーナはブレスレットの弁明をするが、聞き入れてもらえない。アルバーニンは、一度は幸せを夢見たが、それも病人のうわごとのように消え、憎悪と嫉妬、苦痛と恥辱ゆえに男ながら泣いたことを認める。ニーナは泣いて膝立ちになり、両手を天にさしのべ、すべてご存じの神に無実を証してくれるよう訴える。アルバーニンはもうじき臨終だから祈りを上げるときだと告げ、毒を盛ったことを明かす。ニーナは信じず、夫の最後の善意を頼って目をのぞき込むが、そこに死を見て、椅子にうつ伏して倒れる。アルバーニンは口づけし、復讐心にも限りはあるとあって、慟哭する。ニーナは、天の裁きがあることを忘れないで、呪いますと叫んで駆け出すものの、気を失ってしまう。アルバーニンは自分は神に呪われた存在だとおそぶくが、彼女の顔には後悔のあとと仮借の徴も見えず、まさかと不安がよぎる。ニーナは最後まで罪を認めない。アルバーニンは嘘だと叫ぶ。

〔4幕1場〕 アルバーニンは机のそばのソファに座っている。苦闘の末、重苦しくとも安堵のようなものを味わったのだが、ときにはまだふと心に疼きを覚える。時がたてば忘れ去り、また安らぎが胸に生まれようと自らを慰める。しかしニーナの懇願する姿が目には焼き付いて離れない。不幸を聞いて駆けつけたカザーリンがそっと入ってくる。お互い演技で暮らして

いる同士なのだから悲嘆をよそおう仮面など取ったらどうだと言って賭博での敗北を語ろうとしたとき、親類縁者がやってきたので、では後日と言い残して去る。葬式で思わぬ散財を強いられたと不平をもらす老婦人も、ニーナの死は社交界の愚かしさに起因すると見抜いている。医者はアイスクリームには気を付けろと言っていたのにとぼやき、老人は遺体の掛け布の豪華さに感心する。疲労の激しいアルバーニンに医者は休むよう勧める。彼は医者に、情けを掛けてやった男に、その一時間後に自分のすべてを奪われてしまったと言って去る。医者は、アルバーニンは気が狂いかけてるが、身体の方は大丈夫と見立てる。正体不明の男と公爵が入ってくる。男は医者に重大な用件でアルバーニンに会いたいと申し出る。彼は病気だが、見込みはあると言い残して医者は去る。正体不明の男と公爵には、受けた恨みを晴らそうという共通の目的がある。公爵は一日前の出来事をなぜ男が知っているのかいぶかしがるが、町中が知っていると聞かされてやりきれない恥ずかしさを覚える。男は公爵の名誉をすすんで擁護する共謀者という以外正体を明かさない。アルバーニンがろうそくを持って現れる。ニーナの遺体の屈託ない顔つきを見て、自分は過ちを犯したのではと不安になるが、必死に打消そうとする。はたしてこの信念を失わせようような人間などいようかと言ったとき、正体不明の男は、自分が失わせてみようと呼ぶ。彼は昔の友人だと名乗るが、アルバーニンは覚えていない。彼は毎回姿形を変えてアルバーニンに付きまとっていたから、行動も考えもすべてお見通しだし、仮面舞踏会では警告さえしたと言う。アルバーニンは出てゆけというが男は応じず、7年前賭博で負かされた時の話する。彼の父は厳格でけちだったので、そのまま帰るわけにはゆかなかった。ところが負けを取り戻そうとしてさらに傷口を広げてしまい、泣いて懇願した彼にアルバーニンは冷酷な笑いを浴びせた。そのときの種が今実を結ぼうとしているのだと話す。男は事件の後、社交界から除け者にされ、金の亡者になった。しかし得た金も健康も瞬く間に消え去り、幸せの扉は永遠に閉ざされてしまった。そこで運命と最後の契約を結んで、今ある自分になったのだと語る。そのときアルバーニンは彼を思い出す。男はアルバーニンが結婚して、裕福で幸せな暮らしをしていると聞いて、執拗に付きまとってやろう決意し、すべてを知って、今その総決算をしにやってきたのだと言う。男は長々と声を轟かせて「おまえが妻を殺したのだ」と叫ぶ。公爵が近づいて来る。アルバーニンは、たしかに自分が相手側の手中にあることを認めるが、まだ知恵も老練さも力も残っていると豪語し、ズヴェズヂチ公爵や正体不明の男が不名誉の死を遂げるだろうと脅す。決闘へ向かおうとしたとき、公爵はニーナはまったく無実であったと明かす。アルバーニンは冗談として退ける。公爵は、プレスレットが偶然シュトラリー男爵夫人に拾われ自分に手渡されたいきさつや、ニーナが公爵を退けたことを話して、男爵夫人からの手紙を読ませる。アルバーニンは彼らに飛びかかろうとしたが、突然力が萎えて肘掛け椅子に倒れ込む。決闘をとせき立てる公爵は、アルバーニンの気がふれたのではないかと疑う。公爵は正体不明の男が企ての邪魔をしたとなじるが、男は、自分はこれで復讐できたが

公爵には遅すぎた、そもそも両者の目指すところは違っていたのだと言う。アルバーニンが立ち上がって神に許しを乞い、笑い出してひざまづき、自分は過ちを犯したのか教えてくれとせがむ。ふたたび立ち上がり、自分は殺人者ではないと言って正体不明の男の目をのぞき込む。隠しだてせず教えてくれ、自分はニーナをたとえその涙の一滴とて天国にも譲りたくないほど愛していたのだと言って男の胸に倒れ込み、泣く。それを乱暴に突き放し、公爵に屋外に連れ出して正気に戻らせようと言ってアルバーニンの腕を取るが、彼はそれを振りきって、ニーナの柩の安置してある部屋の扉へ駆け寄る。正体不明の男は「尊大な知恵もこれでくたばった」と洩らす。アルバーニンはすさまじいうめき声を上げて舞台中央に戻り、「言ってきたとおり、汝は残酷だ」と叫んで倒れてしまう。正体不明の男は、これで完全に復讐できたと満足し、ズヴェズヂチ公爵公爵は、アルバーニンの気が狂っては、自分は永遠に安逸と名誉を奪われてしまったと慨嘆する。幕。

#### IV 『アルバーニン』の全5幕の内容

『アルバーニン』についてもおなじように、ドラマの展開を逐次追ってみよう。登場人物に関していえば、アルバーニン夫妻、カザーリン、ズヴェズヂチ公爵、シュプリフまでは『仮面舞踏会』と同じだが、シュトラール男爵夫人と正体不明の男が消え、かわりにニーナの実家で養育された、オーレンカという奥様お付きの女性が登場する。全体は5幕23場の構成になっているが、総分量は半分近くに削り込まれている。『仮面舞踏会』の方は、各場がさらに合計50景に細分されているので、『アルバーニン』の幕と場は、量的にはそれぞれ『仮面舞踏会』の場と景に相当するといつてよいだろう。そこで比較の都合上、『アルバーニン』の内容紹介は各幕毎にまとめることにする。

〔1幕〕 前の3分の2はほぼ『仮面舞踏会』の1幕1場そのままだが、主な登場人物たちのエンゲルガルト邸での仮面舞踏会への移動はなく、アルバーニンは一人で帰宅する。後の3分の1で、公爵は負けを取り戻してくれたアルバーニンの態度に自分への軽蔑を感じて、金は受け取るべきではなかったと悔やむ。カザーリンによれば、アルバーニンはそのようなことは一向気にせぬ男で、たとえ今日のうちに彼の金を巻き上げ返したところで何も言わないだろうと言う。しかし公爵は、気持ちの通じない人間への「借り」を不快に思う。カザーリンは、アルバーニンの美人の妻ニーナが夫をあまり愛していないらしく、ベチョーリン家集ったとき、彼女が悩ましげなまなざしでズヴェズヂチ公爵を探していたのを目撃したと告げ、夫アルバーニンが田舎へ行っているあいだにニーナを誘惑してはとそそのかす。若い人たちは働き疲れ、真面目くさったことばかり叫び、失敗を恐れて冒険もせず、25歳くらいで皆面倒だからといって結婚する時代だと、世代批判をひとくさりやり、公爵がそうでないことを暗に求める。



公爵は世間の噂になるのではないか、アルバーニンの友人のはずのカザーリンが裏切りはしないかと恐れ、他言せぬよう頼む。カザーリンは公爵に『仮面舞踏会』4幕1場（8景）で正体不明の男が吐くせりふと同一の内容（ただし『仮面舞踏会』では7年前の事件だが、こちらでは12年前の話になっている）を告白する。すなわち、アルバーニンとは今まで表だって喧嘩はしていないが、賭博での大敗の恨みをずっと抱き続けており、それで昔の恨みを晴らそうというのである。

〔2幕〕 アルバーニン家の舞踏会。ニーナは踊りを申し込んでくる客のあしらいに忙しい。ズヴェズヂチ公爵は自分にも愛想よくしてくれと公然と要求する。ニーナは人目をはばかり、ちょっと待ってと言い残して去る。オーレンカには踊りの相手がいない。アルバーニンは、仮面の客が来ても皆は断らぬように言いつける。彼が客の一人にした話では、オーレンカは幼いときにニーナの母親のもとへ引き取られた孤児で、子どもより従順で妻のいい話し相手だが、無口で暗い。結婚後は、お付きとして同居し、もうじき3年目になるらしい。別の部屋では、客のある夫人から、厳格な賢者のように世間をソドム視しているといわれた男性客が、社交界は働くことなど思いもつかず、退屈まぎれにあちこち出入りするだけの世界だと言う。そういう当人も行き場がなくてアルバーニン家の舞踏会に来ているのである。アルバーニン邸はちんととりすました冷たい感じで、たまらぬくらい甘ったるく、無垢な雰囲気だという。豪華だが来客の中にはビリヤード場や種々の寄り合いに出入りする人間も混じっているの、舞踏会の調子はいまひとつだと言う声も漏れ聞こえる。オーレンカは不幸なわが身を嘆く。美しさと賢さでは社交界の女性たちにひけを取らないつもりだが、男たちは彼女らの方に群がると悲しむ。彼女の恋いこがれているズヴェズヂチ公爵が落胆して、心の動揺を隠せぬ様子で現れる。二人は会話するが、オーレンカの本心からの恋心はロマンチックな空想ととられる。公爵には憂さ晴らしの相手が必要だっただけのこと。ニーナが疲れ切って入ってくる。ズヴェズヂチ公爵は彼女をしきりに口説こうとする。ニーナは夫のために、たえず社交界の人々の目を意識し、口元に微笑みを絶やせない不満を漏らし、一瞬でもよいから愛が欲しいと訴える。公爵は、目の前に愛はあるじゃないかと打ち明ける。初めて会った日、彼女の目が悲しみに曇っているのに、夫は鋼鉄のように冷たくそばに立っているのを見て、そんな彼女を愛そうと誓ったのだという。ニーナは人に聞かれるのではないかと恐れつつ、自分も愛していると答える。ズヴェズヂチ公爵は愛の印にせめて一度接吻をと迫る。ニーナは、あえて抱擁をふり解こうとはせず、しかし男というものは心だけの愛では満足せず、自分のアヴァンチュールの成功を友人たちにはのめかして、女性の名譽を侮辱するものだと言って牽制する（『仮面舞踏会』におけるシュトラリー男爵夫人の、1幕2場6景のせりふに同じ）。仮面が戸口に立っている。ズヴェズヂチ公爵は愛の質草にとニーナのプレスレットをもぎ取る。ニーナは返してくれなければ夫に殺されると訴える。オーレンカが、他人に気づかれてはいけないと二人の間に分け入る。ニーナはせめて名

誉だけは傷つけないでと行って去る。ズヴェズヂチ公爵はアルバーニンの妻をたぶらかしてやろうというつもりだったが、どうやら本気で彼女を愛してしまったらしいとつぶやく。オーレンカは公爵にせめて感謝の一言でも言って欲しいと思うが、自分を犠牲にする習慣から抜け出られないことを自覚する。側耳を立てて盗み見していた中国人風の仮面は、結末がどうなるかズヴェズヂチ公爵に聞くが、盗み見や盗み聞きは中国では許されていようが、こちらじゃただでは済まないぞと脅して、早めに帰宅する。カザーリンは仮面をはずして笑う。怒って帰ったズヴェズヂチ公爵を見かけたアルバーニンが来る。カザーリンは、公爵が恋をささやいていた相手がかならずしもオーレンカではないと言うが、誰かは明かそうとしない。アルバーニンは、自分が貞潔で妻を愛しているのだから、妻もそうであろうと期待して完全な自由を与えていると言う。カザーリンはその無頓着を皮肉る。アルバーニンは内心疑いながら、カザーリンがやっかみで言っているのだととる。彼はアルバーニンが昔のままの冷血漢で、嫉妬したりわめき立てたりしないのに感心するが、留守にするときはズヴェズヂチ公爵とニーナの関係に気を付けろと警告する。そして遠かったし、組格子の陰だったからしかとは見えなかったがと断って、今しがた聞こえた公爵とニーナの話し声や溜息、接吻の音のことなどを告げる。アルバーニンはそれが嘘なら恐ろしい報復を覚悟しろと脅す。カザーリンは昔ながらの怒り狂う野獣のようなアルバーニンを見たと、笑って立ち去る。アルバーニンは、自分は夫となり父となるような人間ではなかったのだと慨嘆する（『仮面舞踏会』の2幕2場6景の独白と同じ）。また戯れの恋と放蕩の日々の末にニーナとの愛のある結婚生活が実現したことを回想して独白する（『仮面舞踏会』の1幕3場2景とはほぼ同一内容だが、最後のところに「ふたたび＜嫉妬と激怒と＞愛がうつろな胸の中で…」と、＜嫉妬と激怒と＞を追加）。

〔3幕〕 アルバーニンは悪意ある暗示に心の平静は千々に乱れるが、とりあえず証拠をつかむことが必要だと思う。目覚めたばかりのニーナが入ってくる。不機嫌な夫に彼女は、社交界を捨てて田舎へ行こうと、なぜ言ってくれないのか、また誰にも嫉妬せぬほど、愛にも淡泊だと愚痴る（『仮面舞踏会』の1幕3場3景のニーナのせりふの前半に同じ。ただ、「深夜の帰宅」という状況が「朝〔昼?〕の目覚めの時」に変わっている）。アルバーニンは嫉妬は滑稽だと言い、屈折した過去が夫婦の愛情関係に陰を落としている事情を述べる（『仮面舞踏会』の1幕3場3景のアルバーニンのせりふにはほぼ同じ）。ニーナは理解に苦しみ、いったい何を要求しているかを尋ねる。アルバーニンは、愛まで求めるのは無分別だが、最低限求めるのは、自分に名誉と名前を大切にさせてくれということであると答える。彼は妻がその名誉と名前を世間の連中に侮辱されるようなことをしたのだというのである。ニーナは答えるのも恥ずかしいという。アルバーニンはズヴェズヂチ公爵が付きまとっていることへの苦情を言う。今後は3アルシン以内に男は近づけないし、口も聞かなければ見もしないと言って、夫の言う「貞淑な妻」を皮肉って笑う。売り言葉に買い言葉が続くが、ニーナは釈明させて欲しいと願う。ア

ルベーニンは許さず、彼の望みは復讐だという。ニーナは密告者を恨んで泣く。アルベーニンは、偽りに満ちた人生の末に見つけた本当の愛の対象となった妻、自分に残されたたったひとつのものであるニーナが、もし裏切ったとなれば復讐すると言って激怒し、復讐のためには法には訴えたりはしない（つまり、直に手を下す）と脅迫する（『仮面舞踏会』の1幕3場5景のせりふにほぼ同じ）。怖がるニーナにアルベーニンは、自分はあざけ笑われ、滑稽な役を演じているのだという。ニーナはズヴェズヂチ公爵とのことを覚られていると感じ、公爵が愛しているのはオーレンカだと、とっさの嘘をつく。すぐにオーレンカを問いただそうとするアルベーニンに、ニーナは責め苛んではならないと言い、なんとか先延ばししようとする。オーレンカへの尋問が始まる。ニーナはオーレンカにこっそり、自分を破滅させないでとささやく。アルベーニンは、オーレンカの回答には彼ら夫婦の生死がかかっているのだと断って、ズヴェズヂチ公爵が毎日この家へやってくるのはニーナが目当てかと尋ねる。彼は、昨日ここで立ち聞きされた愛の告白の相手は、オーレンカだったのかニーナだったのかと詰問する。彼は、もしオーレンカなら、二人の関係を責めはしないが、明日にもこの家を出なければならない、だが夫にとっては妻の名誉が何よりも大切なのだと訴える。家を追われては行き場のないオーレンカは返答に窮し、ニーナに救いを求める。アルベーニンはオーレンカが答えられないので、ニーナの裏切りをほぼ確信し、引き下がるように命じる。オーレンカは待って下さいといって、ついに嘘の自白をする。アルベーニンはニーナに謝罪し、誹謗者とともに神の裁きを受けると告げる。

〔4幕〕 カザーリンの部屋。ズヴェズヂチ公爵が今夜彼の所で開かれる夜会に自分の方からやって来るといふ。来ても賭博には手を出さないといっているが、それはむりというものと胸算用する。どうやら早々と来たようだと出てみると、意外にもアルベーニンであった。カザーリンは、ズヴェズヂチ公爵が来るが、賭博で金を巻き上げるつもりなので、アルベーニンの方は今日は自制してくれと頼む。アルベーニンは、公爵には一言も言わないと約束するが、カザーリンを誹謗者と決めつけ、かつては賭博で窮地を救ってやったのに、ねたみに思っている彼を軽蔑すると告げる。カザーリンはニーナが幾らか貞淑でないからといってなぜその罪を負わされなければならないのかと反論する。激しい口論の中でアルベーニンは、7年前に賭博に勝ったイタリア人をカザーリンらが殺した事件で、酔っぱらって窓から飛び降りたと口裏を合わせてやったときのことを思い出させ、賭博の戦利品の紙入れから偶然手見つけた証拠の手紙を見せる。アルベーニンは、悪には悪をもって報いるという。カザーリンは降参して、5万ぐらいで手を打とうとする。アルベーニンは拒否する。カザーリンは開き直って、アルベーニンという男は、彼の言うことも妻の言うこともすなおに信じる、社交界では数少ない夫だと皮肉る。アルベーニンは、オーレンカが自白したと伝える。カザーリンはもうじきやって来るズヴェズヂチ公爵に真実を言わせるので黙って聞いていると言う。ズヴェズヂチ公爵が遅れてやってく

る。カザーリンは怒らないかと念を押しながら、オーレンカの名は出さず、言葉巧みにズヴェズヂチ公爵にはたして「その女」を誘惑したのかと、かまをかける。公爵は誰のことか見当がつかない。ニーナのお付きだというと、公爵は冗談にもほどがあると否定する。カザーリンは、アルバーニンが自白した「その女」を家から追い出したと伝える。公爵はオーレンカの自白は偽りだと主張し、気の毒ではあるが、好きではないから結婚など考えるのも滑稽だと言う。詰問するアルバーニンにズヴェズヂチ公爵は、自分が臆病者でも卑劣漢でもないことを決闘で決着を付ける前に、証拠を見せようと言って、ブレスレットを取り出す。アルバーニンは盗んだのだろうと言って取り合わず、卑劣漢の汚名を負って死ぬだろうと宣言する。ズヴェズヂチ公爵は決闘を申し込む。アルバーニンは明日9時自分の家で、と指定する。ズヴェズヂチ公爵はカザーリンに介添えを依頼する。

〔5 幕〕 アルバーニンが入ってきて扉の方へ行く。召使いの話では、ニーナは一晩中アルバーニンの帰りを待っていたが、夢にうなされ、明け方起きて書斎へ来ると安楽椅子で寝入ってしまったと言う。アルバーニンは、復讐という言葉が耳を離れない。裏切られたといういまいし。ニーナに告白させようと決意する。かつては天才を自負し、運命と愉快に闘い、誇り高く、強く、自由だった自分が、今や苦悩と悪に翻弄されるしかない愚か者に成り下がったことを嘆く。オーレンカは家を出ようとニーナに別れを告げにきて、アルバーニンに会ってしまう。アルバーニンは身寄りも行きどころもなく、その美貌がかえってあだとなりそうな彼女に同情する。ニーナが嘘をつくように仕向けたのではないかと質す。それでも立ち去ろうとするオーレンカに、しばらく待てと止める。ニーナが目覚め、不吉な夢の話をし、不調を訴える。自分に対する夫の態度がすっかり冷たくなったのはなぜかと聞く。アルバーニンは、人生ははかなく、誕生から死までは目に見えぬ傷による心労と苦痛の連続であり、総じて欺瞞だという厭世的な人生観を披露する（『仮面舞踏会』の3幕2場2景のアルバーニンのせりふに、句読点の小差以外は一致）。ニーナは生きたいと言う。気分がとてもすぐれないので医者を呼んで頼むが、呼ぼうとしない。愛してくれないと嘆くニーナに、アルバーニンは、裏切られた上に愛まで求められるのは、苦々しいかぎりでも物笑いだとつぶやく。彼は十年ほど前、一夜の賭博で有り金残らず失ったとき、毒を買ってきて再びカードのテーブルにつき、残っていたルーブリを賭け、負けたらそれを仰ごうとしたことがあった。負けは取り戻せたが、以後ずっとそれを「暗黒の日」のために護符として持ち歩いていた（最後の行が、「その日は近い」から「その日が来た」に変わった以外は、『仮面舞踏会』の3幕1場2景のアルバーニンのせりふに一致）。それをレモネードに入れて置いておいたというのが、コップは空になっていた。ニーナは自分が飲んだと言う。喜ぶアルバーニンにニーナは、舞踏会好き以外に何の罪もないのに、なぜいじめるのかと訴える。アルバーニンはブレスレットを投げつけ、自分を裏切ったからだと責め、告白を要求する。アルバーニンは、一度は幸せを夢見たが、それも病人のうわごとの

ように消え、憎悪と嫉妬、苦痛と恥辱ゆえに男ながら泣いたことを認める（『仮面舞踏会』の3幕2場2景のアルペーニンのせりふにほぼ同じ）。ニーナは夫が彼女の死を望んでいると知って、たしかにズヴェズヂチ公爵を愛していると告白するが、それは気の迷い、いたらなさ、錯覚、空想であったと弁解し、まだ自分は若いし、命を取り戻すにためなら、望み通り何でもするからとすがって頼む。彼女は拒絶されて死の恐怖におびえながら、アルペーニンの残酷さも「神の裁き」を受けるだろうと叫ぶ。ニーナはオーレンカの前にひざまずいて、生きたいと懇願する。アルペーニンはオーレンカに、真実を知るために少し脅しただけだという。毒は盛らなかったのである。低劣な心の持ち主であるニーナを処罰するには、死ではなく、恥がふさわしい、これからも長生きするだろうが、誰の愛も、誰からの復讐にも値しないと告げる。アルペーニンは最後の闘争に疲れはて、もはや何の望みもなくなっている。そこへ決闘にやってきたズヴェズヂチ公爵は、家族に取り囲まれての決闘とは、じつに新奇だと皮肉る。カザーリンは介添え人の選定も安直で形式に沿っていないと言う。ズヴェズヂチ公爵はあくまで決闘を求める。アルペーニンは一時間前までは復讐によって恥辱をぬぐい去る気でいたが、迷いは醒めたという。ニーナのような女性は社交界にはいくらでもおり、決闘で勝ち得た栄光に拍手する者もいるだろうが、事態を醒めた目で見れば、そういったすべてのことが無意味だと語る。この女には真の愛など望むべくもないのだから、闘う理由もないとも言う。そして命を奪いたければどうぞとばかりに胸を突き出す。カザーリンはズヴェズヂチ公爵に早く撃て小声で言うが、ズヴェズヂチ公爵は何もせず去る。アルペーニンは、姿をくらまそうとするカザーリンを呼び止め、受けた屈辱の証人としての清算はまだついていないと言い、嘲笑的な調子で、自分もうじきカムチャトカへ行くと告げる。カザーリンは仰天する。最終の別れの場面。アルペーニンは自らを追放処分にしたわけである。オーレンカには、過去に人生をかき乱されるなど言い残し、将来の生活は保障してやると告る。また戻る日はあるかとのオーレンカの問いに、アルペーニンは「けっしてない」と答える。幕。

#### V 「名誉」－ この貴族的なるもの、

#### 「復讐」－ この悪魔的なるもの

当時のロシア貴族社会において男性側に支配的だった行動規範と精神倫理は、いささか浅薄さと皮肉の混じったかたちではあるが、ズヴェズヂチ公爵に体现されている。この形象は二つの戯曲を通じて基本的に性格を変えていず、著者レールモントフの創作計画は、ズヴェズヂチ公爵に関しては一貫していると言ってよい。主人公エヴゲーニイ・アルペーニンも同じ貴族的エートスの虜であるが、ズヴェズヂチ公爵に比べると、その批判者の面も合わせ持たされている。一方女性側に支配的だった行動規範と精神倫理は、一人または複数の形象に、ポジティブな意

味で典型的に体现されるということはない。それはいつも男性原理によって押しつけられた「期待される貴婦人」にそぐわない結果として、つまり犠牲者というネガティブなかたちでしか表現されないからである。

両性の貴族文化に共通する価値は「名誉」である。ただし男性にとってはそれは「何よりも大切にするもの」、「何を犠牲にしても守るもの」であるのに対して、女性にとってはどちらかというところ「汚してはならないもの」、「犯されてはならないもの」であって、受けとめ方は相対的に消極的である。

彼らにとって「名誉」は抽象的なものではなく、かならず目に見える記号として、あるいは物自体ではないが、認知可能な人間関係の様相（それも広い意味では記号である）として存在していた。『仮面舞踏会』では、持っていた金を全部すってしまったズヴェズヂチ公爵が、肩章を賭けてはどうかと勧められる（1幕1場1景）。しかしこれは彼にとっては単なる換金可能な物ではなく、名誉そのものだった。また『アルベール』では、主人公はズヴェズヂチ公爵に負けを取り戻してやるが、その態度に「恩義」をうけた方は軽蔑を感じ、名誉が傷つけられたと思う。公然と侮辱されたのではないから、いきなり決闘を申し込むわけにはいかない。名誉回復のための手段は、貴族にとっては決闘しかないとされていたから、公爵はそのために、アルベールの名誉をわざと傷つけて決闘にしむける機会をうかがうという、実に手の込んだ理解しがたい行動をとる。カザーリンが弁護するように、アルベールは賭博の勝ち負けには冷酷で、その帰趨そのものにいちいち「名誉」の判断を絡ませたりはしない男である。したがってズヴェズヂチ公爵公爵によるアルベールの態度の意味解釈は、読まれる側にとっては筋違いである。記号の恣意性がこうして「名誉」にからむ諸問題を複雑にしていく。

ではアルベール自身は「名誉」に関して、近代的に意識改革された人間であったかというところ、かならずしもそうではない。彼は「嫉妬する夫」が上流社会では「臆病者」や「卑劣漢」なみに蔑まれることを気にしている（『仮面舞踏会』1幕3場3景および2幕2場1景のアルベールのせりふにこれを暗示する言葉がある。『アルベール』でも前者と同じものが3幕2場2場1景にあり、2幕6場には、「妻に完全な自由を与えている」というせりふがある）。舞踏会では、たえず入れ替わる男女の組み合わせが、絢爛豪華な自演ショウをともに楽しむのが建て前だから、夫たちが格気のまなざしを向けだしたら、たしかに雰囲気はぶち壊しであろう。18-19世紀のヨーロッパの貴族社会では、貴族の男子たるもの、妻の浮気は黙認すべし、あえて決闘に訴えるなかれ、とする風潮が強かったとされている<sup>9)</sup>。つまり貴族としては狭量な人物と見られる方が、もっと名誉を損なうことだと考えられていたのである。しかし愛と嫉妬はいつも背中合わせになって現れる自然な人間感情である。形式的夫婦が通常の状態であった上流社会では、「嫉妬する夫」も、妻の不倫を理由とする決闘もたしかに数は少なかったかも知れない。しかしレールモントフがロマン主義の枠の中で創作しようとした「悪魔的形象の系譜」<sup>10)</sup>

に属するこのヒーローは、自然な人間的感情と「規範」とに挟まれ、嫉妬そのものの苦しみに自分の貴族的意識が作り出す圧力が加って、倍加された苦痛を味あわなければならなかった。そこでアルペーニン独特の「復讐の美学」を作り上げる。『仮面舞踏会』のアルペーニンは、妻が夫の愛を裏切ることは、夫の名誉を傷つけたというよりは、「愛」という高貴なものに対して、「背信」という下劣なもので報いた行為であり、したがってその落差を埋めるためには「報復」という、特別な回復装置が必要になると考えるのである。妻とは決闘することはできないのだから、決闘はこの回復装置にはならない。当事者が等しく責任を負うという個人中心の観点からすれば、この考えはより人間的であるといえよう。「名誉」を全面に押し立てる限り、夫婦間の問題は世間体の問題に矮小化されてしまう。アルペーニンのこの美学はズヴェズヂチ公爵公爵に対しても適用される。かれが公爵を許せないのは、「名誉」を傷つけたからというよりは、恩を仇で返したからである。したがって「決闘の美学」の信奉者である公爵に対しても、けっして決闘を問題解決の手段とはせず、睡眠中にひそかに殺害をはかろうとしたり、言いがかりをつけて相手を侮辱し（平手打ちは、貴族には耐え難い侮辱だった）、しかも決闘に応じずに侮辱の限りを尽くすという「復讐の美学」で対抗したのである。貴族たちの理解では決闘はけっして人殺しではないから、相手がすすんで対等の条件で応じない限り成立はしないのである。この意味でも、レールモントフの、当時としては先進的な文学的立場からすれば、彼の創造したロマン主義的に「自立した」個人の目には、決闘はもはや時代遅れの風俗に映っていたといえよう。

アルペーニンと「復讐の美学」を共有するのは正体不明の男である。ただかれはアルペーニンと違って、賭博の勝敗には遺恨を抱くタイプである。遺恨は名誉とは次元を異にする、個人の、あるおさまりのつかない持続的感情で、おさまりををつけるためには、相手に同じだけの痛みを体験させなければならない。一回目の検閲後に追加した第4幕目に、主人公と同様の美学の持ち主を登場させたことは、レールモントフがよほどこの、「決闘の美学」に代わるものに執心していたことの証であろう。アルペーニンが最後に気が触れてしまったために、決闘の機会を失ってしまい、永遠に名誉回復の望みが絶たれてしまったズヴェズヂチ公爵とは対照的に、正体不明の男は「復讐は成就した」と言って満足する（4幕1場8景）。つまり二つの美学の優劣がここに示されているのである。アルペーニンや正体不明の男の前にズヴェズヂチ公爵がいかに軽薄で、いささか衰れに描かれているのも偶然ではないだろう。

『仮面舞踏会』には公爵の他にもう一人、名誉を重んじるタイプの人物がいる。シュトラリー男爵夫人である。5年ほど前に夫を亡くした彼女は、世間が未亡人を見る目を必要以上に意識している。社交界という場所は一方では非常に冷厳で、一度烙印を押されたら、首都での生活はまずあきらめざるをえなかった。この当時から半世紀ぐらいた後に、レフ・トルトイの長編小説のヒロイン、アンナ・カレーニナが陥ったのと同じ奈落は、すでにしっかり用意されてお

り、上流階級の女性たちは大なり小なりその危険性を日常的に意識していなくてはならなかった。まして男爵夫人は借金を抱え、社交界には特に有力な後ろだてもないらしい存在である。しかし彼女は人間らしく生きたいという気持ちを人一倍持っている人でもある。仮面を付けたときはじめて本音で語ることができ、はじめてしたいと思っていたことができたのである。仮面を付けた彼女がズヴェズヂチ公爵に向かって、「おまえは、無性格で不道德で、不信心で利己的で、意地の悪いひ弱な人間だ。おまえ一人の中に全時代が映っている」（1幕2場2景）と挑発するが、それはおそらく著者レールモントフがこの戯曲の2年ほど後にある詩に書く、同代人への批判<sup>11)</sup>にも通ずる真実の言葉であろう。またつかの間の秘められた交わりの記念になるものを要求されると、シュトラリー男爵夫人は、男たちは後で大勢の前で秘密をうち明け、女性を笑いものにすると鋭く告発する（1幕2場6景）。彼女はこのとき、本当の意味での女性の名誉について語っているのである。これはズヴェズヂチ公爵の貴族的「名誉」とは同列に論じられない問題である。シュトラリー男爵夫人は自分がエゴイスティックな名誉にこだわったために多くの犠牲者を出してしまったことを罪深く思い、真相を打ち明けた手紙を残して、田舎へ隠遁する。これ以外に自らを罰する方法がなかったのである。レールモントフは名誉というもがあるべき本来の姿を、このようなかたちで示し、社交界を現に支配している「名誉」の、実体のない価値を貶めているわけである。

さて『アルペーニン』になると、今まで述べたことは少し変更しなければならない。主人公のエヴゲーニイ・アルペーニンは、古典的な「名誉観」に縛られている場面もあるからである。妻のニーナが遅く帰宅して、不機嫌な顔をしている夫に日頃つづけていた不満を漏らしたとき、カザーリンからニーナと公爵の関係には気をつけろと言われていたアルペーニンは、彼女が何らかの程度は顰蹙を買いかねない行動をしていると確信して、「もちろん愛してくれというのは無分別だし、私としても求めようとは思わない。愛の言葉だのお世辞だのを言って、下心のある接吻をいただこうという年頃じゃないからね。私の心とおまえの心はすれ違っている...何をしようとおまえの勝手だ...ただ、少なくとも私に名誉だけは大事にさせてくれたまえ。名誉、名前、これこそ私がおまえに求めるものだ。ところがおまえは名誉や名前を世間の連中の冒瀆するがままにさせている。はっきりと言おう....おまえはぜんぜん分かっていないのだ。だがせめて今回だけは分かっていたきたい」（3幕2場）と要求している。また、オーレンカに対する尋問の際、「夫にとって妻の名誉は何にもまして大切なのだ」（3幕3場）とも言っている。

ただこれを額面通りにとるべきかどうかは別のはなしである。カザーリンのところへ誹謗者呼ばわりして乗り込んだり、自分の妻との関係についてズヴェズヂチ公爵と直接対決したりする行為は、本人が言うように「真相を突き止めてやる」（2幕6場）という内的衝動に根ざしたものであろう。まかりまちがえば「決闘の美学」の餌食になりかねない危険な行為なのに、



それを知りながらもそうせざるを得なかったのである。そして自分が欺かれたという事実が明らかになれば、それが誰であれ、アルペーニンのとるべき手段は「復讐」でしかなかった。たしかに最後に一度、表向きは「決闘主義」に譲歩し、ズヴェズヂチ公爵の決闘申し込みを受け入れた。しかし決闘成立のためには必須の条件である場所と時間を、アルペーニンは自宅で9時にと指定した。これは最初から決闘はしないつもりだったということを証明しているといっ  
てよいだろう。なぜなら決闘のルールでは、家族には場所や時間をぜったい秘密にしておかねばならないからである<sup>12)</sup>。そのうえアルペーニン自身は介添え人を指名していない。ズヴェズヂチ公爵が「家族に囲まれての決闘というのはずいぶん新奇じゃないですか」（5幕6場）というまでもなく、決闘の条件は最初からそろっていなかったのである。アルペーニンはやはり復讐しか考えていなかった。ただ誰にどのような報復を、という点については最後まで確信がなかっただけである。それはアルペーニンの次のせりふからも明らかである。「一日前、いや一時間前まで私は血が、復讐が、欲しかった。自らの権利と名誉の擁護者であるこの私は、胸にうちふるえる期待をもって、恥辱と誹謗を排撃することを考えていた。ところが私の方が間違っていたのだ。目から迷いの鱗が剥がれ飛んだ。君たちが正しかった、勝ち誇りたまえ、前途には栄光の勝利が待ち受けているよ。夫どもが絶望し、世間が拍手喝采を送る今回のような勝利が。それにあらゆる点であれに似ている女たちはまだまだいることだし」（5幕6場）。

『仮面舞踏会』と『アルペーニン』では、戯曲の基本的テーマに関わる問題に対して、作者の態度が本質的に変化している。両者とも「決闘」の無意味なことを明らかにしている点では共通している。前者ではこれに対して「復讐」がほぼ対極的な位置におかれ、原理的優位性が強調されていた。主人公が発狂するのは、いわば「神による報復」である。ところが『アルペーニン』になると、この「復讐の美学」は相対化される。両戯曲を通じて執拗に繰り返された「悪魔＝アルペーニン」の数々の独白と、戯曲『アルペーニン』における最終幕の、急に物わかりのよくなった主人公のせりふは、明らかに不協和音を奏でている。これを検閲への無原則な譲歩による「中和」と見る見解には与しない。「決闘の美学」が不毛なら「復讐の美学」もまた同じくらいに不毛だという、あらたな模索がレールモントフの内部において始まったと見るべきだからである。この戯曲を最後にレールモントフは、物語詩『悪魔』や未完の長編歴史小説歴史『ワジム』の「悪魔系」の形象から、未完の散文小説『リゴフスカヤ公爵夫人』や『現代の英雄』の「ペチョーリン系」の形象へと、創作の方向を転換し始める。戯曲『アルペーニン』にはその断層が走っているのである。しかしこのことについては稿を改めて論ずるべきであらう。

## VI ニーナの変貌とプーシキン夫人ナターリヤ

『仮面舞踏会』と『アルペーニン』のもう一つの大きな違いは、ニーナの形象に見られる。両者を区別するために、『仮面舞踏会』の方を旧ニーナ、『アルペーニン』の方を新ニーナと呼ぶことにする。登場人物のせりふを比較すると、新ニーナにはシュトラリー男爵夫人の性格がそのまま受け継がれていることが分かる。アルペーニン邸での舞踏会で、ズヴェズヂチ公爵はアルペーニンを決闘にひきずりだそうという魂胆があって、新ニーナを口説き、抱きしめて接吻をせまる。彼女はあえてその抱擁をふり解こうとはせず、「はしたなくてよ。ほんとに男の方たちは、みなさん同じなのね。今度はニーナの気持ちじゃ足りなくて、すべてを欲しがるのですもの。私の名誉を汚すところまで行かなくては済まないの。だから舞踏会だとか野外行楽のときにお会したりすると、にやにやしながらお友達のみなさんに滑稽な出来事としてお話になり、その方たちが分からなくなっていると、教えてやろう、ほらあの女だよといって指さすのにきまっているわ」（2幕4場）。これは「ニーナの気持ち」というところを除いて、『仮面舞踏会』におけるシュトラリー男爵夫人の1幕2場6景のせりふと一致する。また新ニーナが夫の執拗な詮議に開き直って、「どなたが私を誹謗なさったのかは存じませんが、たしかに私はそれに値する女でした。お愛想笑いもしましたし、打ち解けた態度も見せました。冗談も申しました。ええ、もう今日からは、男の方には3アルシン以内にお近づきいただかないようにいたしますわ。（皮肉をこめて）お口もききません、視線も向けません。ダンスもしません。カードのテーブルにもつきません。お人形さんや彫刻みたいにじっとしています。そうしたら私はあなたの気に入ってもらえるのね。そうしたらあなたは、うん貞淑な妻だとおっしゃるのね。そんな女の方ってどなたにも恨みがましい目つきをなさるわよ。（笑い声をあげて）滑稽でたまらないわ。本当に、恥ずかしいとは思いませんか？こんなつまらないことで大騒ぎしたりして」（3幕2場）と反撃するところは、シュトラリー男爵夫人が仮面舞踏会でのきわどい出来事の翌日、ジョルジュ・サンドを読みながら「それにしても私たちって、いったい何のために生きているのかしら。よその人にいつまでも気に入られるようにし、いつもへつらっているためよ。ジョルジュ・サンドの言うことはほとんどその通りだわ。今の女性って何なの？意志を持たない被造物、他の人間の情欲や気まぐれのおもちゃじゃないの！社交界に裁かれながら、その社交界には擁護してくれる人はいない。女は自分の感情の炎のすべてを押し隠すか、花の盛りに消してしまわなければならない。女って何かしら。うんと若いときから生け贄みたいになされて、儲けのために売られて行く身。自分一人を愛しているといっっては罰せられ、でもほかの方がたを愛することは許されない。ときには胸に激しい感情が吹きすさんで、恐ろしさも分別も色んな思いも追い散らしてしまうことだってあるのに」（2幕1場1景）と思う気持ちと、重なりと見てよいだろう。つまり新ニーナは、夫の不機嫌な態度に愚痴を言うだけの旧ニーナ

よりも、ずっと女権意識に目覚めているのである。

この大きな変化を、検閲への譲歩の結果と考えるのは無理である。シュトラリー男爵夫人が新ニーナの形象に部分的に吸収されて、無実の旧ニーナから「不倫願望」を持った新ニーナに変貌し、ドラマチズムの面でも、かならずしも濡れ衣ではない嫌疑をかけられるという、あらたな主題展開を作り出しているのだから、これはレールモントフの意識中に、転換を促す何かが生じたと考えるのが妥当であろう。そのうえ、オーレンカというまったく新しい人物が加わって、作劇術上大きな役割を担わされていることを考えあわせると、この予感ますます現実味を帯びてくるのである。ちょうどこの戯曲の執筆時期に、サンクト・ペテルブルグの社交界では『仮面舞踏会』や『アルベীন』に描かれた状況に似た事件が起きていた。それは詩人プーシキンに関わるいまわしい出来事であった。フランス出身の近衛騎兵連隊少尉ダンテスが詩人の妻ナターリヤに人目もはばからず執拗にまとわりついて、口説き落とそうとしたのである。結局それが匿名のプーシキン誹謗文書配布事件へと発展し、周囲の人々の取りなしで一度はおさまりがついたかに見えたものの、1837年1月末プーシキンはダンテスとの決闘でついに命を落とすことになる。

戯曲とプーシキン夫妻の運命の関係については、前掲の拙論でも触れておいたが、その6年後、旧ソ連でエセーニン研究家でも知られるアール・マルチェンコが、その独創的なレールモントフ評伝の中で、けっして偶然とは思えない一致点が数多くあるのに、プーシキン研究者たちがまったくこの問題に触れてこなかったのは解せないとして、かなり多面的に検討している<sup>13)</sup>。プーシキンの晩年についての伝記研究はショーゴレフが『プーシキンの決闘と死』を1916年に公刊して以来大きな蓄積があり、事実の解明は年とともに進んでいる。マルチェンコがレールモントフの評伝を書いたときから現在までの10年間にも、前進が見られる。そこで最新のプーシキン伝記研究に依拠しながら、マルチェンコとは違った観点から戯曲『アルベীন』を読み直すことにしたい。

その前に、その最新の伝記<sup>14)</sup>から関係のありそうな部分を抽出して、表にまとめておこう。個々の「証言」には、複雑な利害関係や人間関係が反映しているので、何が事実であったかの究明は実に困難である。ここではレールモントフが戯曲『アルベীন』を書き上げる時点までに知りえたであろう情報（それが正しいかどうかは別にして）という一点に絞って整理する。（出来事はすべて1836年のことである）

- ・年のはじめ。     ダンテスがナターリヤに言い寄っているという噂が社交界に広がる。
- ・2月のはじめ。     ダンテスは初めてナターリヤに愛を告白する。ダンテスは彼女も気があると確信。
- ・4月                二人は出会うことが希になる。ナターリヤはほとんど外出せず。プーシキ

ンは4月29日から（5月23日まで）モスクワに出ていて不在。

- ・ 6月（夏期） プーシキン家の人々はカーメンヌイエ・オストロヴァーの別荘地へ移る。近衛兵たちは演習に出かけており、7月末までは閑散としている。
- ・ 8月 近衛騎兵連隊がノーヴァヤ・ヂェレーヴニャ（プーシキン家が休息していた別荘地の近く）に駐屯。二人は昼となく夜となくひんぱんな出会いを重ねる。ダンテスはナターリヤの姉のエカテリーナにも近づく。夏場の舞踏会が始まる。8-9月頃社交界で二人の関係がもっぱら噂になる。
- ・ 9月 舞踏会シーズンが盛んになり、プーシキンの目にもダンテスが入ってくる。ソフィア・カラムジナの目撃情報では、夫婦の関係が「警戒段階」に入ったとされる。おそらく、妻に何らかの釈明をさせたもよう。しかし外部には妻には完全な自由を与えているような印象を与えていた。ナターリヤはプーシキン抜きで社交界に出入りする。カラムジン家に集う若者たちの間に、ダンテスの真剣さをロマンチックなものとして崇める風潮。ダンテスはこの頃一時マリヤ・バリャチンスカにも言い寄るが、ナターリヤは知らない。9月12日市内の住居として借りているモイカへ戻る。ペテルブルグでもダンテスはナターリヤのいるところへは必ず顔を出す。

レールモントフはプーシキンとは直接面識がなく、当時は社交界に出入りしたての無名の近衛騎兵連隊の一下士官であったから、プーシキン情報の入手はおのずと制約を受けたことであろう。ただ、すでに伝記研究ではよく知られていることだが、近衛士官学校の同級生で同じ連隊に勤務するセルゲイ・トゥルベツコイとは親しくつきあっており、セルゲイの兄を通じてダンテスのことはよく聞いていたらしい。兄アレクサンドルはダンテスと連隊仲間だったのである。だから噂程度の情報はリアルタイムに耳にしていたはずである。またダンテスという男はロシア社交界のしきたりは気にもとめず、これみよがしの行動をとったということであるから、観察しやすい対象であったことはたしかであろう。したがって、次のような状況も、すぐ近くの出来事であったから、レールモントフは知り得たはずである。「8月、近衛騎兵部隊がカーメンヌイエ・オストロヴァーの別荘地のすぐ近くのノーヴァヤ・ヂェレーヴニャに駐屯すると、ヘッケルン中尉（ダンテスはその年、駐露オランダ大使ヘッケルンの養子となり、ダンテス＝ヘッケルンという二重姓を名乗っていた——木村）はペテルブルグにいたときよりはるかにひんぱんに詩人の妻とあう機会を得た。自由気ままな別荘地の習慣に乗じて、彼は彼女と夜会のときだけでなく、昼の散歩のときも会っていた。ダンテスはプーシキン家の別荘にも訪問を重ねた。彼に恋したエカテリーナ・ゴンチャロヴァ（ナターリヤの姉の一人で、1834年以来、田舎暮らしでは良縁に恵まれないからと、プーシキン家に同居。このとき彼女は27歳。

妹とは対照的に容貌には恵まれなかったと言われている——木村)が、彼との『出会いの機会をふやそうと』努めたことをうかがわせる資料がある。大勢の女性に見境なく言い寄っていたダンテスは、彼女にも目を付けたが、それはその妹のそばにいられる口実を得たいためだった。ダンテスの根気強さと恋心を訴えるときの熱烈さにナターリヤはすっかりのぼせ上がってしまった。彼女は彼が自分に大恋愛をしていると信じたし、とてもその道にうとい女性であったから、しかるべき時にちゃんと彼を制止することができなかった<sup>15)</sup>。

『アルペーニン』のオーレンカは、養女としての差別はあったにしても、新ニーナとは姉妹のように育てられた女性である。新ニーナの結婚後はアルペーニン家に同居している。そして人妻目当てに足繁く通ってくる不誠実な男に恋してしまうという状況は、マルチェンコも指摘しているが、偶然の一致とは思えない。オーレンカの形象についていえば、エカテリーナとの違いは容貌くらいのものである。ところでエカテリーナの方はその後間もなくダンテスと結婚する。そのことがプーシキン夫妻側とダンテスおよびヘッケルンの側の対立の局面をいっそう錯綜させてしまい、ドラマよりもドラマチックな一連の事件の展開があった。しかしもとよりそれは『アルペーニン』の執筆に取り組んでいたレールモントフの予測しうところではなかった。それはさておき、新ニーナがズヴェズヂチ公爵に気持ちを動かされるところは、当時のロシア社交界の人々がプーシキンの妻ナターリヤを見ていたときの印象と、これも合致する。

プーシキン自身が妻に対してリベラルな態度をとっていたことは、社交界の一部ではよく知られている事実だったらしい。ただし詩人のつねとして、かなり嫉妬深かったことは、妻に宛てた手紙の冗談の裏に読みとることが可能である。これはむしろ自然な人間感情であり、貴族の古い「倫理」の方へ譲歩して、欠点だと見る必要はまったくない。「プーシキンはダンテスに対していらだちを押さえることができなかった。彼の事態は、この詩人にたいして友好的だったこういう人々に囲まれてさえも、たまらないものになっていたのであろう（その人々の中に混じってダンテスがいて知って、プーシキンがひどいかんしゃくを起こして招待を断ったことを指す——木村）。おそらくプーシキンにはこのとき、妻との何らかの話し合いがあったものと思われる。彼は生じた事態によって深い不安にとらわれてはいたけれど、しかし時が来るまでは断固たる措置は何もとろうとしなかった。逆に、周囲の人たちには、プーシキンが自分の妻に完全な自由を与えているようにさえ見えた。彼は彼女にダンテスと会うことを禁じなかったし、D.F.フィッケリモンの回想では、『若くてとても美しい奥様に夫の同伴なしで社交界に行くことを』許したということである<sup>16)</sup>。ここに述べられていることもやはり『アルペーニン』の内容とよく照応している。2幕6場をのぞいてみよう。アルペーニン邸でニーナをうまく口説いた公爵が、仮面のカザーリンにからかわれて怒って帰った後、アルペーニンがカザーリンの「忠告」を気にして語るせりふの後半である。「そういうよくきく目は夫にとっては宝物だよ。私の場合は何も見えないし何も知らないときている。妻は完全に自由にさせているよ。

愛されていると期待しているし、間違いはしないものと当てにしているのさ。こちらだって浮気はしないし、愛してるのだからね」。このアルペーニンとは、たとえ心中とは矛盾することを言っているとしても、『仮面舞踏会』のアルペーニンとは、大きく性格を異にしている。レールモントフに、「妻を自由にさせている夫」のイメージが生まれたに背景には、プーシキンを観察した成果があったと思われる。

マルチェンコのように、プーシキンがナターリヤとは踊らず、踊り疲れた彼女にアイスクリームを持って行ってやったというエピソードだとか、彼がとても賭博好きでたいてい負けていたというようなことを含め、細かな一致点まで数え上げていけば、他にもいろいろあることは明らかである。問題はただ、そういう「モデル論」的レヴェルの関心にはとどまらないところにある。

『アルペーニン』の中でレールモントフは新ニーナに、夫に報復され、捨てられた女性という側面と、貴族社会の犠牲者という側面とをあわせもたせ、さらに女権論的に目覚めた意識の持ち主であることも暗示している。『仮面舞踏会』における一方的犠牲者としての旧ニーナよりも、形象的にはずっと豊かになっていると見るべきであろう。最終場面で青ざめている新ニーナを見ながらアルペーニンに、「... それにあらゆる点であれに似ている女たちはまだまだいることだし。（中略）何のために我々は闘うのだ、我々のうちの一人がもう一人を殺す。それからどうなると思う？ コケにされるだけだ。ああいう女は舞踏会に出たらすぐ、次の情夫か夫を見つけるからね」（5幕6場）と言わせているが、そうすることによってレールモントフは、こういう人間タイプが一つの典型性を有していたことを指摘しているのである。おそらくナターリヤを見る目もそのようなものであっただろう。レールモントフは『詩人の死』を流布させた罪を咎められてカフカーズへの転属を命ぜられるが、それから戻った後にじかにナターリヤと話す機会を得た。一般的にはそのときから彼女への人物評価を変えたとされている。しかし戯曲執筆の時点でも著者は、ナターリヤをイメージしたと思われる新ニーナを見れば分かるように、このようなタイプの女性を一面的に貶めて見ていたわけではない。新ニーナも『仮面舞踏会』のシュトラリー男爵夫人のように、仮面舞踏会で仮面を付けていないときは、社交界の掟に逆らわぬよう内も外も仮装した存在である。新ニーナは、ズヴェズヂチ公爵に口説かれたとき、その内なる仮面のをそっと脱いでみたのであろう。そのことの自然さをレールモントフはきちんと押さえているのである。内なる仮面を脱ぎ捨てたいという願望が社交界の女性たちにあまねく広がっている現実を理解しているから、アルペーニンに上のようなせりふを言わせているのである。アルペーニンのばあい、たしかにズヴェズヂチ公爵のような「名誉」観からは自由であったが、愛し愛される関係の破綻という現象を、いちど「名誉」がらみのコンテキストに置き換えてみなければ納得できないという限界があった。それはシュトラリー男爵夫人の抱く名誉観にも通ずる価値観であり、当時のロシア貴族社会のなかに生まれた、より先

進的ではあるが、まだ近代的自我までには距離のある考え方であったと言わなければならない。なぜなら彼らの目に映っていた「現実」の持つ仮面性には気づいていないからである。

レールモントフの意識は思想史的にはもう少し先を行っていた。だから、おそらくプーシキン夫妻を観察しながら一種のもどかしさを感じていたことだろう。結局古い名誉の意識のとりこであったプーシキンが、決闘で命を落としたとき、まっさきに彼の思念の中をよぎったのはそのことであった。そのとき一気に書き上げた『詩人の死』という詩が、「詩人が死んだ！名誉の囚われ人が」という一行で始まっているのは故なきことではない。続けて、「詩人の魂は耐えることができなかった、／ささいな侮辱で受けた汚名を。／世の考えに立ち向かった、／前のようにひとりで — そして殺された。」<sup>17)</sup>とも書いている。この「ささいな侮辱（複）」というところに、プーシキン夫妻をみまった不幸な運命に対する、レールモントフの評価が現れている。つまりレールモントフの目から見れば、プーシキンがあれほど思い悩み、苦しみ抜いた社交界内の陰謀や誹謗は、とるに足らないものとして相手にしなければよかったと考えていたのである。戯曲『仮面舞踏会』や『アルペーニン』はロシア上流社会の存立基盤に内在する仮想性を、それを俯瞰できる別の次元に据えたメタ視点から捕らえようとしている。たしかに文学史の座標上に位置づければ、これらの戯曲は方法論的にはロマン主義の使い古した約束事を踏襲してはいるけれど、作者の視点とそれを支える意識だけは時代を先取りしていた。レールモントフのばあい、ひとつの作品の中に古いものと新しいものが同居しているのがむしろ常態なのである。彼もプーシキンと同じように、そのわずか4年ぐらゐ後に決闘で死んでしまう。ただし「名誉」の意識にとらわれてでも、汚名を雪ぐためでもなかった。彼はしばしばその毒舌で周囲の人間たちを侮辱してしまうことがあった。最後の決闘もそれがきっかけで（レールモントフの性格を知っている者たちがそれを利用したのかもしれない）、かれは申し込まれた決闘を受けて立たざるをえなくなったにすぎない。したがって最初に発砲する権利を得たのだが、レールモントフは空に向けて撃った。そのようにして決闘というもののくだらなさを意志表示したのである。ただレールモントフも腰抜けよわばりされるのはいやだったようだ。貴族の誇りは彼にもあった。この矛盾した状態はレールモントフの文学に似ているといえよう。

完

## 注

- 1) См.: Ашукина Н. С. Историко-бытовой комментарий к драме Лермонтова «Маскарад» // Маскарад Лермонтова. М.; Л., 1941. С. 223-227 (Маскарад в доме Энгельгарда); С. 227-235 (Карточная игра); С. 236-238 (Дуэль).
- 2) 池上俊一『賭博・暴力・社交 遊びからみる中世ヨーロッパ』、講談社選書メチエ、1994年、

- pp. 41 - 42 参照。
- 3) 山田勝『決闘の社会文化史』, 北星堂書店, 1992年, p. 247.
  - 4) 同上。
  - 5) См.: Эйхенбаум В. М. Пять редакций «Маскарада» // Маскарад Лермонтова. М.: Л., 1941. С.93 - 108.
  - 6) 木村崇「戯曲『仮面舞踏会』－作者の構想の表層と深層－（下）」(中京大学養論叢, 1978年, 第19巻第1号, pp.101 - 171。
  - 7) 『仮面舞踏会』(岡林栄英訳, レールモントフ選集Ⅱ, 池田健太郎／草鹿外吉共編, 光和堂, 1976年) 所収。
  - 8) レールモントフの戯曲テキストの底本には次のものを使い, 引用・要約の箇所は文中に幕, 場を示すにとどめ, いちいち頁は示さなかった。Лермонтов М. Ю. Соч.: В 6 т. М.: Л., 1956. Т. 5. С. 275 - 402 («Маскарад»); С. 532 - 601 («Арбенин»).
  - 9) 山田勝, 前掲所, pp. 88-96 参照。
  - 10) 悪魔の形象の系譜とは, レールモントフがほとんど全創作活動期間を通じて改稿を重ねた物語詩『悪魔』(«Демон»)の主人公, 神に反抗して地上に突き落とされた堕天使のように, あらゆるものを破壊してまでも自己の意志の絶対的自由を追求してやまない孤独な性格を基本的形象構成原理として共有する主人公群を指している。物語詩では『大貴族オルシャ』(«Боярим Орша»), 戯曲では『二人兄弟』(«Два брата»), 散文小説では『ワジム』(«Вадим»)などをさすが, この流れは「余計者」に分類される『現代の英雄』(«Герой нашего времени»)の主人公ペチョーリンにも流れ込んでいると見てよい。
  - 11) Ср.: Лермонтов М. Ю. Соч.: В 6 т. М.: Л., 1954. Т. 2. С. 113 - 114. 1838年に書かれた『思い』(«Дума»)という詩である。この詩は「私はわが世代のことを悲しげに見ている／その将来はむなしいか, でなければ暗いものだろう／ものを知り疑うことの重みにあえぎ／この世代は無為のうちに老いてゆく」で始まる。
  - 12) 山田勝, 前掲所, pp. 8 - 9。家族に知られてはならなかっただけでなく, 全般的に秘密は保持されなくてはならなかった。決闘は建て前としてはどの国でも「立派な」犯罪だったのである。
  - 13) См.: Марченко А. С подорожной по казенной надобности. Лермонтов. М., 1984. С. 205 - 215.
  - 14) Ср.: Абрамович С. Л. Пушкин в 1836 году (предыстория последней дуэли).
  - 15) Там же, С. 51.
  - 16) Там же, С. 53.
  - 17) Лермонтов М. Ю. Соч.: В 6 т. М.: Л., 1954. Т. 2. С. 84.